2010 年 3 月 24 日放送

漢方医人列伝 「多紀元簡・多紀元堅」

二松学舎大学　東アジア学総合研究所　准教授　　町　泉寿郎

【多紀元簡の伝記】

多紀元簡は、宝暦５年（1755）に幕府医官である多紀家第６代の元悳の長男として、江戸に生まれました。祖父は８代将軍吉宗の御匙（主治医）を勤めた多紀家５代元孝です。弟には、幕府医官湯川家を嗣いだ安貞と安道、鍼灸の医官山崎家を嗣いだ安粛がいます。元簡は、幼名は金松、通称は安長といいました。

元簡が１１歳の明和２年（1765）、祖父元孝が幕府に申請して神田佐久間町の天文台跡地を貸与され、医学館を創設します。このとき、父元悳の友人であった井上金峨という儒者が学事顧問として参画しました。元簡は父元悳や目黒道琢について医学を学び、井上金峨について漢学を学びました。創立当初の医学館に対しては、幕府典薬頭である半井家・今大路家らから度重なる妨碍がありましたが、若くして医学者として頭角を顕した元簡は、父を支えて医学館の教育と研究に尽くし、素問・霊枢・難経・傷寒論・金匱要略・本草のいわゆる「六部書」を中心とした古典重視の医学教育が、ここに確立しました。臨床家としても優れ、３６歳には奥医師に昇進しました。寛政３年（1791）に医学館が幕府の直轄医学校となったのに伴い、元簡は世話役（現在で言えば国立医科大学教授）として、重立世話役（現在で言えば国立医科大学長）となった父を支え、父の没後は重立世話役を継承

し、文化７年（1810）１２月２日に５６歳で急逝するまで医学館を率い、その教育と研究の基礎を固めました。

【多紀元簡の業績と逸話】

18 世紀後半は、儒学における荻生徂徠一派や古方派医学における吉益東洞流が独創的な学説を唱えたあと、それに対する賛否両論が一斉に興り、次第にそれらの学説の斬新さが飽きられた時代と言えるでしょう。次には、学問方法が吟味されるようになりました。井上金峨はさまざまな学説の中から妥当な説を取捨選択して折衷する折衷学派という新しい儒学を唱えましたし、目黒道琢も歴代の文献医学博捜した客観的な古典研究に着手しました。元簡はこれらの人物に導かれ、医学古典を歴史文献学的に研究したといえます。また、医学館を基盤に幕府・諸大名・古寺社に所蔵する医学古典のテキストを数多く収集し、一方では同時代の清朝考証学の成果にいち早く着目しました。その著書としては、『素問』『霊枢』『傷寒論』『金匱要略』といった基本的な医学古典に関する注釈書を著し、これらは医学館の教科書として長く使用されました。また、脈状に関する歴代の説を整理して、客観的な基準の難しい脈診の指標を示した『脈学輯要』のような著作もあります。『観聚方要補』は歴代の２１２書から２４００近い名方を採用し、博学な元簡ならではの処方集となっています。

希少な古書の刊行や収集にも先駆的な成果をあげました。平安時代の本草書である深根輔仁の『本草和名』、多紀家の先祖である丹波忠雅の『医略抄』、また仁和寺本『医心方』、朝鮮本『医方類聚』などが挙げられます。元簡が使用した印の一つに「白米 腸に充たして聊か肉に当て、書を好んで手に到れば銭を論ぜず」という言葉を刻んだものがあり、いかに本の収集に力を注いでいたかが解ります。

また匙加減が鈍らないように薬の値段を一切知らなかったという逸話が残っています。晩年、奥医師の人事に関して譴責を受けたことがあり、その人柄は清廉ではあるがやや圭角があった、いかにも学者らしい人柄であったように思われます。

とにかく、多紀元簡の存在がなければ、その後の考証医学の発展はなかったのではないか、そう思わせるほどの時代を劃した傑出した医学者であったと思います。

【多紀元堅の伝記】

多紀元堅は、寛政７年（１７９５）に元簡の５男として、江戸に生まれました。幼名は鋼之進、通称は安叔、茴庭・三松・存誠薬室などと号しました。多紀家第８代の元胤は腹違いの兄にあたります。元胤は、優れた学者でしたが、残念ながら３９歳で早死にしています。元堅は、父元簡に医学を学び、大田錦城という儒者に漢学を学びました。大田錦城は、井上金峨の門人山本北山に学んだ優れた学者で、元簡の信任が厚く、幕府直轄になる以前の医学館に出講して、多紀氏一族と親交がありました。２０歳の時、臨床修行のために別家して分家を立てました。後に幕府医官となって、元矢の倉（現在の浜町）に屋敷を

拝領したので、向柳原(むこうやなぎわら、現在の浅草橋)にあった本家・向柳原多紀家と区別して、これを矢の倉多紀家と呼びます。元堅は、３７歳の時に医学館の講師を命じられて、昇進の糸口をつかみます。４２歳で奥医師となり、４６歳で法印に昇進し、さらに大御所家斉の御匙代理（主治医代理)、12代将軍家慶・１３代将軍家定の御匙を長く勤め、また医学館の世話役（教授）を兼務しました。その家塾には全国から多くの入門者が集まり、その数８００人に上りました。

【多紀元堅の業績と逸話】

元堅は早熟の人で、15 歳のとき既に古い朝鮮の医学全書に引用された佚文（いつぶん、既に散逸してしまった文献）を拾い出して、古い医学文献の復元作業を行っています。またこの頃から、兄元胤を手伝って父元簡が遺した著作を整理刊行しています。１８３０年代以降は、医学館において医学古典の講義をしながら、父元簡の古典注釈書を補遺する著作を執筆し、順次刊行していきました。元堅はこれらの著作の中で、父元簡の資料博捜の上に説を立てる方法から更に進んで、真に考証学的な手法（歴史文献学的な研究方法）をとった医学古典研究を進めました。例えば、父の時代には未発見であった文献―例えば仁和寺本の『黄帝内経太素』や宋版『外台秘要方』といった文献―が世に知られるようになったのを受けて、現在伝わっているテキストと古いテキストを比較検討して、テキストのもとのかたちを復元することに力を注いでいます。臨床に関する著作としては、父が脈診書を残しているのに対して、元堅は腹診書を残しています。また、医学古典の解題書として中国でも度々出版されている『医籍考』を、早く亡くなった兄元胤の遺著としてまとめたり、漢籍解題の名著として知られる『経籍訪古志』の編纂にも関与しました。

また、世話役としては、この頃やや停滞傾向が見られた医学館の教育体制を立て直すために､祖父元悳と父元簡のもとに大田錦城･目黒道琢らが出講した1780年代を理想として、「六部書」（素問・霊枢・難経・傷寒・金匱・本草）を中心に、併せて基礎学としての儒学テキストを講ずるかたちに改めました。また、寛政時代に直轄化されて以降は許されていなかった、幕府医官以外の各藩の医師や町医者の出席を再開しました。こうして、渋江抽斎や森立之のような優れた人材が医学館に集まるようになったのです。

父元簡が蒔いた考証医学の種は、元堅のもとで大きく花開いたと言うことが出来ます。

父元簡と元堅には、谷文晁が描いた肖像画が残っていますが、八の字眉毛に厚い唇の、丸々と太った姿かたちは、親子というより双子といってもいいほどよく似ています。